

遠い戦争を「自分事」として考えるために

遠い戦争を「自分事」として考えるために

私たちは日々、遠い国で起きている戦争のニュースに触れています。映像を見て心を痛めながらも、「自分には直接関係がない」と感じ、やがて日常へと戻っていく——この感覚は、多くの人にとって自然なものかもしれません。しかし、国際情勢の変化はすでに私たちの生活に入り込んでいます。物価の上昇やエネルギー価格の変動といった形で、戦争は確実に私たちの暮らしと結びついています。戦争は「遠い出来事」ではなく、すでに私たちの生活の延長線上にあるものなのです。国家が戦争へと向かうとき、その背景には「自分たちは正しい」という確信と、「相手を単純化して敵とみなす認識」があります。

しかしこの構造は、国家だけのものではありません。私たちの日常にも同じような構造が存在しています。意見の違う相手を遠ざけたり、自分の立場を正当化したりする場面は、SNSや人間関係の中で珍しくありません。規模の違いはあっても、その延長線上に戦争があると考えるならば、「自分とは無関係」とは言えないはずです。

情報環境が「偏った世界」をつくる

現代の情報環境では、自分と似た意見ばかりに囲まれやすくなっています。異なる視点に触れる機会が減ることで、自分の見ている世界がすべてであるかのように感じてしまいます。

その結果、対話よりも対立が選ばれやすくなり、社会の分断は深まります。そして分断が進んだ社会では、極端な判断や強い言葉が支持されやすくなっていきます。

世界で大きな出来事が起きると、政治はしばしば「今は特別な状況だから」として、例外的な判断を行おうとします。これはどの国でも見られる現象です。一見すると合理的に見えるこの「例外」ですが、一度認められると、それが少しずつ日常に入り込み、「当たり前」へと変わっていく危険性があります。問題は、この流れが政治だけで起きているのではないという点です。

私たちが「今は仕方ない」と受け入れるたびに、例外は社会に定着していくのです。

現代の情報環境では、自分と似た意見ばかりに囲まれやすくなっています。異なる視点に触れる機会が減ることで、自分の見ている世界がすべてであるかのように感じてしまいます。その結果、対話よりも対立が選ばれやすくなり、社会の分断は深まります。そして分断が進んだ社会では、極端な判断や強い言葉が支持されやすくなっていきます。

「難しいからよく分からない」「つらいニュースは見たくない」「強い言葉のほうが頼もしく感じる」「流れてきた情報をそのまま信じてしまう」こうした日常の感覚は、小さなものに見えて、社会全体の空気をつくっています。そしてその空気が、政治の判断や方向性を支えているのです。つまり、政治は遠い存在ではなく、私たちの日常の延長にあります。戦争に対して「反対」と言うことは大切です。しかしそれだけでは不十分です。重要なのは、自分自身の思考や行動を見つめ直すことです。自分は異なる意見に耳を傾けているか。情報をそのまま受け入れていないか。「例外だから仕方ない」と思考を止めていないか。こうした問いを持つことが、社会のあり方を変える第一歩になります。

「なぜトランプは良くないのか」と問えるか

ここで一つの問いがあります。

「なぜトランプは良くないのか」を、自分の言葉で説明できるでしょうか。

この問いは、特定の人物を評価するためのものではありません。自分が何を問題だと感じているのか、その理由を言葉にできるかどうかを問うものです。

「なんとなく嫌い」ではなく、「どこに違和感があるのか」を説明すること。それは、自分の価値観を明確にし、社会を自分事として捉えるための出発点になります。

「自分の問題は社会の問題である」という視点

私たちは、自分の不安や違和感を個人の問題として処理しがちです。しかし、その背景には社会の構造や政治の判断が関わっていることが少なくありません。

「自分の問題は社会の問題である」と捉えることで、私たちは現実をより深く理解できるようになります。そしてそれは、社会にどう関わるかを考えることにもつながっていきます。

社会を変えるために、大きな行動が必要とは限りません。

- ・ ニュースを見たときに一度立ち止まること
- ・ 「例外だから仕方ない」という言葉に敏感になること
- ・ 強い言葉ではなく、丁寧な説明を求めること
- ・ 異なる立場の人を単純に敵としないこと

こうした小さな行動が、「例外が当たり前になる社会」を防ぐ力になります。

戦争を遠いままにしないために

戦争は、突然どこかで起きるものではありません。人々の認識や関係の積み重ねの中から生まれます。

だからこそ、それを遠い出来事として眺めるのではなく、自分の生活や思考の中に引き寄せて考えることが必要です。

遠い戦争を遠いままにしないこと。

それは、「自分はどのように社会と関わって生きるのか」という問いに向き合うことでもあります。

そしてその答えは、特別な場所ではなく、私たち一人ひとりの日常の中にあるのです。

チームパシュートの活動

チームパシュートは、特定の組織や肩書きに縛られない、市民一人ひとりの意思と問題意識から生まれるゆるやかなコミュニティです。

共通しているのは、「社会に対して何かを感じ、考え、行動したい」という思いだけ。それぞれが異なる背景や専門性を持ちながら、ひとつの方向に向かって力を重ねていきます。

このコミュニティの特徴は、その名の通り“チームパシュート”のような動きにあります。

誰か一人が固定的に先頭に立つのではなく、場面や課題に応じて最も適した人がリーダーとなり、役割を引き継ぎながら前進していく。先頭は入れ替わりながらも、全体としては一つのまとまりとして進み続けます。

市民活動や政治参加の場面においても、それぞれの得意分野や関心を活かしながら、無理なく関わり続けることができるのが、このコミュニティの強みです。

個人では難しいことも、ゆるやかにつながることで実現できる。そんな持続可能な関わり方を大切にしています。チームパシュートは、「誰かがやる」のではなく、「自分たちで社会に関わっていく」ための、新しいかたちのつながりです。

メンバー紹介 吉田りこが得意とすること

「人と想いをつなぎ、形にする伴走者」



中小企業の経営者として現場を支えながら、ネットリテラシーや家庭教育をテーマにした講師・アドバイザーとしても活動。

PTAをはじめとするボランティア活動に約20年携わり、地域や家庭、教育の現場に寄り添い続けてきました。

起業して20年。女性の社会進出の支援や、子どもたちのより良い教育環境づくりにも力を注いでいます。現場感覚と実践力を兼ね備え、「一人ひとりの声」を大切にしたい関わりが持ち味です。

得意分野は、イベント企画や講師業をはじめ、パソコン（Office全般）の活用、料理、文章作成、そして人の話に丁寧に耳を傾けること。

人と人をつなぎ、想いを具体的な行動へと変えていく力で、チームの前進を支えています。